cult. in Sendai (H. Ogura s.n., Sept. 7, 1977, type in TI), ibid. cult. in Kyoto (G. Murata 12139, Aug. 2, 1958; Sept. 3, 1959, Sept. 21, 1962, KYO). Hikawagun, Kubotamura (S. Takahashi 516, Aug. 1936, KYO). Ochigun, Iwamicho, Umanoseyama, Dangyokei, alt. 200 m, on rock, cult. in Sendai (H. Ogura, Sept. 7, 1977, TI), ibid. alt. 400 m (Y. Kadota 20001, Oct. 21, 1980, TI).

□五百城文哉（画）：**日本山草図譜** 150 pp., 99 pls. 1982. 八坂書房，東京。¥24,000. 五百城文哉の名は割に知られていないが，文久3年（1863）に生れ，明治39年（1906）に若くて死去した洋画家である。晩年を日光に過ごし，その筆に成る画帖が東京大学の日光植物分園に保存されており，しかもあぶなく失火で消失するところであったのが幸にも助かった。私も分類実習で日光に行く毎にこれを見ては故人の筆の跡を偲んだものであった。今回それを版に付したが，中々よく出来ている。これはほとんど実物に接してその姿を写したもので，リンドウやタチツボスミレもあるが，高山植物が主であるからトウヤクリンドウやハクサンチドリはもちろん，コウシンソウやオサバグサなどがあり中々あきることを知らない。中井猛之進先生が一応同定をしているが，大場秀章君が学名を改めてつけた。同君の解説として五百城氏の経歴はよく書けているし，附置した文哉の「秋の花」及び「赤薙の一角」も文哉の人物を彷彿とさせる。 （前川文夫）

□里見信生・鈴木三男：**石川県の巨樹** 288 pp. 1982. 石川県林業試験場，石川県鶴来町。非売品。これはまことに特色のある出版物である。表題に特に天然記念物指定に関する規準の考察という附記がある通り，単なる老樹大木の調査報告ではない。石川県では昭和53年から3年に互り県内の老樹大木を調査したのが基本になってはいる。それが大変な重労働であったことを里見氏は序言で告白しているがそれを超えてはじめて達しえられた境地であろう。基準として，幹と根との境界部からの 1.5 m 高さを目通幹周として測り，これに樹高をmで測った数字を加えてこれを表示し，目通の数字で排列した。しかも全国のものと，石川県内のものとを二分して示し，その数字から考察して，たとえばコウヤマキでは国の天然記念物では目通 5.5 m 以上，県のそれでは 3.5—5.5 m ぐらいが適当であろうとした。この事は中々いいにくい事だが，それを実現した氏の行動力に大きな感謝と賛意を表したい。石川県の樹木には 335 も写真を添えてある。イチョウ，スギ，ケヤキ及びクスノキは日本でずばぬけた巨樹があり，前三者には番付まで載せている。 （前川文夫）